

## 日本の消防(第1回)：消防出初式と消防の歴史



2019年1月6日、恒例の東京消防出初式が東京ビッグサイトで開催された。日本の大都市を守る消防の出初式会場は、式典が進行するにつれて曇天となり、冷たい海風に吹かれ、気温の低い中で進行した。特設の観客席は消防関係者や一般都民など大勢の観客で賑わい満席であった。



大勢の一般都民が見学した



東京都消防出初式に掲げられた各消防署旗



儀じょう隊入場行進



音楽隊入場行進

儀じょう隊・音楽隊・カラーガーズ隊の入場で始まった式典は東京都知事と消防総監の乗車する部隊検閲が、続いて消防隊員や救急救命士会、子どもマツチングバンドなど数百名の徒歩部隊分列行進、そして特殊車両を含めた百台を超える機械部隊分列行進へと進んだ。規模の大きさ、壮観な車両行進、充実した資器材を目の当たりにし、観客からは感嘆の声が聞かれた。



出場部隊の検閲をする都知事と消防総監



機械部隊分列行進の先導をする指揮官



救助隊分列行進



消防隊の分列行進





救急救命士会の行進



子どもマーチングバンドの行進



機械部隊分列行進



災害現場警備本部開設車



危険物火災に対応する化学消防車



梯子車



消火用水を積んだ水槽付消防ポンプ車



障害物を乗り越えて進む高踏破救助車



救助工作車

続いて江戸消防記念会による伝統の木遣り行進や梯子乗りが披露された。乗り手は長さ 6.3 米の梯子の上で両手・両足を離した妙技を見せるなど、江戸火消しの意気ごみを披露した姿に大きな拍手が沸いた。



紐に足先を掛け体を支える技



足で支え手足を開く技

以上の披露が終了すると出初式の見せ場である消防演技が、消防署・消防団・消防支援団体の合同で実施された。訓練想定は高層建物人命救助、倒壊建物人命救助、倒壊建物火災消火、他に化学物質爆発火災消火の各演技が実施された。これらの演技には航空隊のヘリコプターも参加し、空陸一体となつての救出が展開された。



消防演技に参加するヘリコプターが飛来



空から要救助者の確認をする航空隊





地上部隊から可能な限りの高所救助を実施する



最後に取り残された要救助者をヘリコプターで吊り上げて救助



救助工作車や建設重機を使用しての救出作業



火災の発生した建物への消火注水

最終演技として、ヘリコプターやはしご車も加わり、陸上のポンプ車と海上の消防艇から着色の一斉放水が行われ、勇ましい中にも華やかな演出がなされた。



一斉放水で出初式の終演

## 消防は日本社会の重要な活動

日本は自然災害の多い島国。「地震、雷、火事、親父」とことわざに言われたほど、消防が重要なことなのだ。日本の消防は、保有する消防力である人員並びに機械力を住民に示すため各市町村において毎年年頭に重要な行事として、消防出初式を開催している。遡ること江戸時代、消防の起源である町火消の時代からこの時期に開催されていたことに起因する。この町火消は自衛のための組織で現在



の消防団に類似したもの。現代に入り常備消防と非常備消防、つまり消防署と消防団に二分化される組織となった。

従って出初式には消防署の各種の車両、航空機、消防艇、職員の行進、音楽隊など現在の科学消防力が披露されるが、消防団による昔から伝統の梯子乗りなども合わせて披露される。梯子は火事場で屋根の昇り降りや水の入った手桶を運ぶために必須の道具であった。

日本の現代消防は、1947年に消防組織法が公布されて発足した。この法律は日本の消防の任務範囲と消防責任を市町村が負うべきことや、消防機関の構成などについて規定したもので、消防に関する基本法と呼ぶべき内容だ。この定めにより消防は市町村において設置・運営されることとなった。この組織を常備消防と言い、消防の専門職でありこれを生業とするもので、統括するのは消防本部であり、下部に消防署が位置する。2017年現在の資料によるとその消防職員数は全国で16万人である。

常備消防では大規模災害や特殊災害が発生した際に、単一市町村の消防力では及ばないと判断された場合には、隣接する市町村が援助する相互応援協定が締結されている。さらに全国的な支援を有する場合は、緊急消防援助隊組織も定められていて、都道府県単位で組織され国内全域の災害発生地に出動する。風水害・土砂崩れ・大地震発生時などこれらの組織が幾度となく活動し実績を残している。

特に2011年に発生した東日本大震災で発生した東京電力福島第一原子力発電所の炉心溶解に際しては、人体に被爆危険のある中、種々の難題を克服し、消防機関が原子炉への注水を果たしたことは報道を通して多くの人が記憶のことと思われる。さらに外国において発生した災害で支援が求められる場合は、国内消防から登録された隊員により国際緊急援助隊が組織されていて、これまでに実際現地派遣を行っている。

消防は前述の常備消防と共に市町村に設置される非常備消防と呼ばれる消防団組織により編成されている。消防団は会社員・学生・主婦・自営業・公務員など仕事を持った者が自分の居住する地域を守ることを目的に設置されたボランティア精神で団結した組織で、消防団本部の管轄のもと、常備消防と連携しながら災害現場活動や火災予防活動を推進する。特に大規模災害の発生に伴う地域住民の安否確認や避難生活が長期化した際の生活支援など地域に精通した

消防団ならではの活動が期待される。全国での消防団員数は 2017 年現在で 85 万人である。

それではここで、日本を代表する消防組織である東京消防庁の説明をすることとする。日本の首都である東京都の消防本部と理解していただきたい。千代田区大手町に庁舎を構え、東京 23 区と東京都下のほぼ全域の市町村を管轄している。人口 1.400 万人弱 面積は約 2.200 km<sup>2</sup>である。

消防組織法の公布により 1948 年 3 月に発足した。職員数は 18.000 人を超え、消防署は 84 箇所、指揮車・ポンプ車など、前述の出初式機械部隊分列行進で記載のとおりであり、その車両総数は約 2.000 台である。

次に活動状況の主だった種別について触れると、管内における 2017 年中の火災件数は 4.205 件、救助件数は 21.695 件、救急件数は実に 785.940 件に達し、一日に 2.100 件を超える出動となる。

続いて消防団であるが、東京消防庁管轄内での消防団員数は 98 団で 2 万 6 千人であり、前述の非常備消防で説明の通りである。多岐にわたる職種の者が消防団員として活動するもので、管轄区域はあくまで団員の居住する地区であり、通常は広範囲への出動はない。市町村では在籍年齢を定めているところが多くある。

## 地方都市も消防活動を重視

今回東京消防庁の他にも東京都に隣接する神奈川県ほぼ中央に位置する座間市消防本部の出初式取材した。当該消防本部は行政面積がほぼ 18 km<sup>2</sup>、人口約 13 万人を管轄するもので、1967 年に消防本部が発足した。日本の都市としては決して大都市ではないが、1960 年代に工業・商業・農業・住宅地の混在する都市として成長した歴史を持つ。

本部と 3 消防署、加えて 16 の隊と車両を有する定員 223 人の消防団そして女性消防隊 1 隊から組織されている。消防職員及び団員の資質も高く、先進的見地を有する都市である。常備消防車両は指揮車・ポンプ車・梯子車・化学車・救急車など 34 台を保有し、職員は 153 名で日夜災害対応、災害予防業務、災害想定訓練などに立ち向かっている。2017 年中の火災出動件数は 38 件、救助・救急出動は 6.618 件である。

2018年に地上4階建て延べ床面積5,300㎡の、車庫・事務所・仮眠室・訓練施設などを備えた新庁舎が完成、設備も充実しこれまでも増した活動が期待される場所である。

本年の出初式は1月16日、降雨・降雪が心配されたが、幸い好天に恵まれ市立小学校の校庭で開催された。式典は遠藤市長の式辞から始まり、年頭に当たり整列した常備・非常備の隊員には、市民の生命・身体・財産を守ると言う消防の使命が伝えられ、受け止めた隊員は心を新たにした。続いて落合消防長から平時の業務や訓練を通じて災害時に対応する資質を養うべく訓示がなされた。この後の休憩時間には少女マーチングバンドの演技が披露され、しばし和やかな間合となった。



式辞を述べる遠藤座間市長



会場に整列した消防隊員



訓示を述べた落合消防長



総指揮をとる江成消防署長





楽器演奏



旗演技

続いてはこの式典のため特別に準備された1950年製ダットサン消防車に乗った消防長・消防団長の先導で今年度新規導入された4台の車両を含めた約30台の車両行進が行われ、会場の招待者や市民に機械消防力がお披露目された。



自走する貴重な国産消防車



消防ポンプ車



高規格救急車



ポート付きの緊急消防援助隊用支援車



消防団用消防ポンプ車

次に演技披露へと続き、自主防災組織（地域住民、いわゆる自治会で組織する地震災害も含めての防災組織）による消火栓（道路に埋設された水道管から水を取る設備で今回は模擬設備）による初期消火演技が行われた。



放水開始

さらに訓練は座間市消防署と防火安全協会が毎年開催している初期消火競技大会の優勝チームによる屋内消火栓（建物の中に設置されている消火栓設備でここでは模擬設備）と消火器の演技が行われた。





模擬消火栓設備からのホース延長



手際よく放水開始



訓練用水消火器での消火

そして神奈川県消防操法大会で優勝し、全国大会に出場した消防団による消防車からの放水演技が行われた。その機敏さ、迅速さ、正確さを備えた熟練の技に観客からは、消防署員の技量にも劣らぬ仕上がりだとの声が聞かれた。



ホースを担いで火点に駆け寄る



ホース延長に激走





放水開始、体勢も安定している

最後に消防署・消防団・女性消防隊・自衛隊・米軍消防署による合同演技で、伝統の纏振りと梯子乗り、消防車での同時放水が繰りひろげられ、太鼓やラッパの演奏が会場に響く中終演となった。座間市の出初式は、都市規模に見合った市民に寄り添ったきめ細かい独自の演技が披露され、招待者や市民見学者からは大きな拍手が沸いた。



消防署員による纏振り



紐を腰に巻き手放し演技



参加各隊による一斉演技



最後にドローンを見上げながら市民の方と一緒に市長や団長が記念撮影  
根を下ろした消防活動の様子が伺える

今回は日本の消防の現状や発展の経過を踏まえ、東京消防と座間消防二つの都市の消防出初式取材した。住民人口に大きな差があり、さらに都市形態が

著しく異なる両者間において、消防の必要機械種別や職員総数を含めた消防整備力に差異が生ずるのは当然のことである。

国は全国各自治体に対して消防力の基準を定めており、施設・機械力・人員などが一定の基準に達するよう指針を示している。従って各自治体はそれぞれの条件に応じて満たした基準を継続すべく、あるいは満たすべく鋭意努力をしているのが現状である。要するに消防整備力は規模の異なる自治体消防を横一線に並べ絶対値で捉えるものではなく、総合的な状況を加味した下での相対値としてとらえているものであり、その結果を充足率として表している現況は正確な評価と言えるものである。

文 高橋 ぎいち

写真 高橋ぎいち、曹暉

翻訳編集 JST 客観日本編集部